

近森リハビリテーション病院 理学療法科

科長 和田 仁美

はじめに

2025 年は 1 病棟 15 名体制（1 ユニット 7～8 名）7 ユニットの基本とし、理学療法士一人あたりの 1 日の取得単位 19 単位を目標とした運営を行った。また、各ユニットにつき主任 1 名、もしくは療法士長 1 名の管理体制をとり、ユニットの運営を行った。また、新人が 5 名入職し、引き続き教育体制充実と学術活動の強化を模索した。

運営・取り組み

4 月からの人員は入院 51 名、外来 2 名の体制で運営を開始となり、スタッフ一人当たり 19 単位の訓練実施を目標に進めた。

病床稼働率は、前年度と同様の平均 84%程度で推移しており、提供単位数を充実するべく調整を行った。結果として、患者一人あたりの実施単位数は、平均 3.3 単位で前年度と同等となった。7 ユニット体制で病棟の人員配置は育休職員が数名ありながらも総単位取得は大きなムラなく取得することができサービスは充実していた。また、教育面では日本理学療法士協会の新生涯学習制度に準じた院内研修を法人内で年間 6 回の研修会及び 3 回の症例検討会を計画的に実施することができた。また、学術活動については、高知県理学療法学会へ 2 演題、リハケア合同研修大会に 1 演題の発表と回復期リハ病棟研究大会でのシンポジウムでの発表を進めることができた。

実 績

新規入院患者のうち、理学療法を実施した患者の疾患内訳では、脳血管疾患が 72%、運動器は 27%、廃用症候群は 1%と前年度と同様の傾向であった。（図 1）。「月別述べ入院患者実施単位数」は平均 14696 単位と 2024 年（15163 単位）と比較し減少しているものの（図 2）、患者の 1 人あたりの実施単位数は 3.3 単位と例年通りであり、患者一人あたりへの関わりは平均 1 時間以上を維持することができ、訓練量、訓練の質とも担保できていたと考える。また、スタッフ 1 人あたり 1 日の取得単位も平均 19.1 単位となり目標を達成することができた。

外来の「月別述べ外来患者実施単位数」は、平均 186 単位と 2024 年度（190 単位）と比較し大差はみられないが、患者数の減少も認めており当院退院直後に外来に繋ぐ患者の介入頻度を検討し取得単位を増やす工夫を行った（図 3）。

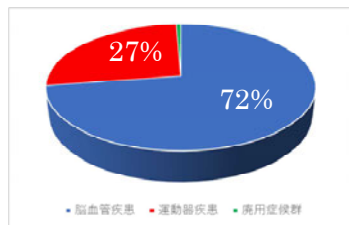


図 1 年間入院患者疾患内訳

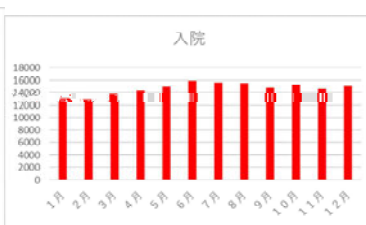


図 2 月別延べ入院患者
実施単位数

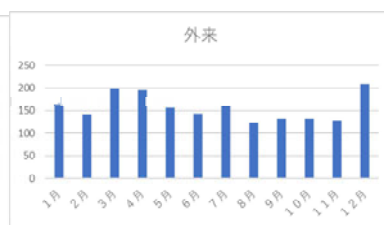


図 3 月別延べ外来患者
実施単位数

おわりに

2025 年は 1 病棟 15 名体制・7 ユニットの運営を基本とし、スタッフ 1 人あたり 1 日 19 単位の取得を目標に取り組んだ。病床稼働率は平均 84%を維持し、患者 1 人あたりの実施単位数は

3.3 単位と前年と同水準ながら、総単位取得数は微減となった。2025 年の退職者は 1 名、育休者が数名いたものの総取得単位に大きなムラはなくサービスの質を維持・向上できた。教育面では院内研修や症例検討会を計画的に実施し、学術活動も活発に行った。

2026 年も前年度同様、計画性をもって量の向上とともに質の高いリハビリを提供できるように取り組んでいきたい。

学術発表・講演会等

学会発表

演題	発表者 共同研究者	学会名	開催
脳卒中発症後 3 ヶ月経過し開始となった長下肢装具歩行練習の効果	門脇 一弘	第 38 回高知県理学療法学会	3 月 2 日 高知
脊損患者に対するロボット補助歩行訓練の導入	北代 堅太郎	第 38 回高知県理学療法学会	3 月 2 日 高知
学習する組織理論に基づく回復期リハ病棟の構造分析	高芝 潤	リハビリテーション・ケア合同研究大会 大阪 2025	11 月 21 ～22 日 大阪

シンポジウム

演題	発表者 共同研究者	学会名	開催
解禁！明日から出来る自主練習	西森 知佐	回復期リハビリテーション病棟大会 第 46 回研究大会 in 札幌	2 月 8 ～9 日 札幌